UrbanDesignLab.Magazine
弟走
"Tewasu" -Pupils Continue Running-
東京大学都市デザイン研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/
編集長：黒本 剛史
編集委員：中井 雄太　王 誠凱　神谷 安里沙
田中 雄大　中村 慎吾　松田 季詩子
2017.1.31 vol.249

としとーく #3　ポスト 2020 を語る

The Discussion by Experts of Urban Planning

text_TANAKA/M1

1 月 12 日、今回で第 3 回目となる「としとーく」が開催されました。都市に関わる様々な業界でご活躍されている都市工学科の OB・OG の方にご登壇いただき、それぞれの業界から都市をどう捉えているのか、そして、ポスト 2020 東京五輪の都市計画について議論しました。

変わる公共空間

―オリンピックで何が変わるのでしょうか。

竹山：ロンドン五輪同様、オリンピック後のレガシーを見据えた計画を進めることは必須ですが、その際には、競技施設だけでなくパブリックスペースのことも考えなくてはならないですよね。昨今、外国人観光客や日本人の海外旅行が増加している中で、既に日本でも海外のパブリックスペースの使い方に近づいているように感じるが、五輪は外国の人が大勢来ることでそうした変化を加速させると思います。

―公共空間を持つ立場として、行政が考えていることは何でしょうか。

大谷：例えば道路も公共空間だが、丸の内仲通りは区のもの。都の道路となると交通への影響を考えないといけないので、いつでもどこでも開放はなかなか難しい。まあでも、そんな固いことを言っている場合じゃない。例えば、臨海部などに都は暫定利用で凌いでいる遊休地を持っていて、民間に使ってもらっている。それに付随する公共空間を整備する時、都としては公園などでも、使い方などは自由にやるべきだと思っている。今までの公園の法律をあまり適用しない対応をしたいなど考えているところ。民間の創意工夫のある取り組みに期待しているしそれに応じて公共空間を開放していきたい。

―民間企業の方々は、これから成長させていきたい分野や、市場について考えはありますか。

大森：渋谷のベンチャー企業と交流していると、日本の産業の移り変わりが激しくなっていることを強く感じていて、2020 年以降も加速していくと思う。リモートで働ける時代になっても産業は人が集まる場所で生まれていく。ベンチャー企業の人は気軽に会える渋谷のような場所でどんどん成長していく。場所を貸すだけではなくてビジネスに関わっていくのがポスト 2020 の都市づくりの 1 つのポイント。公共空間の話では、昨年度の大晦日に初めてハチ公前の交差点を歩行者天国にした。当社もエリアマネジメント（以下、エリマネ）として渋谷の公共空間を面白くする取り組みは色々やっている。二子玉川でも商業施設、住民、区の公園と連結して取り組んでいる。

重松：前の五輪と違って、ハードの措置ではなく、ソフトインフラが大きく変わる。五輪が東京に来ると、我々が感じている以上に感性も変わるのかな。公共空間に関わらず、感性の変化に合わせて、これからは個性の時代になる。都心の公共空間は、非日常のイベント利用と日常的な居場所にすることの 2 つがあって、後者もすごく大事。人の動きが見えていると街の特性が伝わってくる。街をプレゼンできる一つの要素でもある。都心の役割はエネルギッシュでライブ感があること。都市を見せていくためにも公共空間が開かれているのは、日本にとって重要だと思っています。

「一緒につくる」をデザインする

―大小様々なモノを対象とする GK 設計の櫻庭さんは、これからのデザインとして気を配っていることはありますか。

櫻庭：基本的にモノをデザインする会社なので、モノを作らない、買わない時代になった今、私達もデザインの価値や志向を再考していく必要があると思っています。最近は、業務の中でもモノづくりというより仕組みづくりの仕事が増えてきている。例えばトータルデザイン（以下、TD）にしても、これまでのモノとモノの TD に市民参加が加わる構造から、市民参加がメインの TD が求められるようになってきている。プロジェクトのプロセスにいかに市民を巻き込むか、これが将来的な経営を考えたときにも大事になってくると思うんです。今、仕組みづくりの TD が求められているところに社会の変化を感じている。先ほど TD について「2020 に向けて」と言ったが、五輪のお祭りをきっかけにその先を見ていく、暮らしの価値を考えたいと思っている。

大谷：TD という視点は、実は行政と似ている。例えば、清掃工場を建てる時に、代わりに工場の上に市民の意見を聞きながら公園を作りますとする発想とか。これからは、小さな芽を大きく波及させる意味で、作ってからアピールするよりも作る過程に周りを巻き込んでいき、いかにアピールするかはとても大事かなと思う。行政の観点から持続可能性がキーワードになると思っていて、作った瞬間はみんな来るけど、その後定着する人は誰なんだろうと考えた時に、TD の視点はとても重要。人口が増えていた時代のやり方では通用しなくなっていて、行政も責任をもって取り組まなくてはならないと思っているし、一義的には作った人がいかに持続可能なプロジェクトに落とし込むかという責任もある。

大森：まさに今取り組んでいるシェアハウスは最初から完成ではなくて、開業後に入居者と一緒に作っていくんですけど、デベロッパーは最初に作りこみがち。ライフスタイルは時間が経つにつれ豊かになるし、人間関係も長くいると醸成される。そこに焦点を当てた開発ができればいいなと思っていて、それが賃貸住宅の開発部門だと思っています。子供に合わせて、破れにくい障子にしようとか、むしろ落書きしていい壁紙にしようとか、プロダクトの部分からマネジメントは結構つながっているなと、櫻庭さんの話を聞いて思いました。

エリマネは儲からない？

永野（特別助教）：エリマネは街の価値を高める。東京都にも不動産にとっても嬉しい。では、設計事務所にとっては何が嬉しいんですかね。

竹山：エリマネが儲からないということ自体を変えていければよいと思う。所有者の方々が「これからは使い方が大事」、と考えているなら、そこに新しい価値を見出して新たな仕事を生み出すことができれば、設計・計画等の提案サイドにもメリットはある。もちろん、我々も作りっぱなしでよいとは考えていなく、社会に提供すべき価値は、真に必要とされていることなのではないかと考えている。そう考えると、会社や立場は違えど、目指しているものが一緒だと感じることは多い。

櫻庭：今までは CSR で、企業はある意味ボランティアだった。でも今は CSV（共通価値の創造）。ボランティアでは技術投資は難しいけれど、一つの事業として取り組めば、企業としては能力を発揮でき、本当に社会に求められる活動ができる。そういう視点で言うと、NIKKEN ACTIVITY DESIGN lab（NAD）は、雑誌でもよく拝見するし、事業をプロモーションしながら、空間の価値を高めていますね。

大森：他業界と関わってイノベーションを起こそうという動きが出てきている。今までのビジネスモデルが長く続かないという危機感は他の会社もある。業界の広がりは感じる。

重松：たぶんエリマネって中間領域なんですよ。行政と民間の境界が変わってきている。エリマネは独立した事業体ではないと思っていまして、利益を生み出すことを目的としたら、きっと今はうまくいかない。何かの担い手なので、何を担うのかがはっきりして、成立するんですよね。今確立されていない分野だから、色んな人がやっている。社会実験とエリマネっていうのが今のキラーワードで（笑）。だから、アクション起こさないとどんなに考えていても何も起こらない一方で、アクションすれば失敗しても次がついてくることを、実証実験をここ 3 年くらいやっている私としてはすごく体感しています。

竹山：社会実験の段階では、「賭け」のところはあるのでしょうが、やってみることは大事ですよね。

大谷：新たなビジネスモデルが必要だという潜在意識が根底にあるから、展開しているのでは。

重松：先ほど、持続可能性の補助金のお話がありましたが、ぜひ運営面に補助金を出していただきたいんですけど（笑）。

大谷：考えないといけないと思います。今までは一生懸命容積率あげて終わっているけど、それでは限界があるなと。

大森：エリマネでイベントだけをずっと続けていくのは、結構しんどくて、資金や人員の面で区切りをつけなきゃいけない時がくる。自動的に回っていく仕組みをどうインサートしていくか。二子玉川ライズでは、施設の中の公開空地を建設に反対していた地元の人のお神輿が通るんです。神輿ルートを変えただけでお金かかってないんですが、とても盛り上がって、そんなことで街は変わっていくんだなと感じましたね。

竹山：先ほどエリマネも儲からないといけないと言ったのは、エリマネという言葉自体もうちょっと広義で使っていたんです。例えば、ブライアント・パークは BID、税金で経営してますけど、税金だけじゃなくて広告料とか民間企業もうまく使ってやっているそうですね。そこで幸せになる人の対価をどこから持ってくるかを、もっと色々考えたら、やりようがあるんじゃないかなと思って、新しいエリマネをやっていけるといいのかなと模索中です。

重松：仲通りの道路活用実験は、賑わい向上のためにも多様な主体が道路を使用できるようにそこで活動したい企業等に門戸を開くことと、それらの活動主体から街づくり財源を提供してもらうことを両立させる仕組みを、エリマネが介在することで実現できないか、ということも目的としています。私たちが負担し続けるのではなく、サステイナブルな仕組みまでいかないとたぶん成立しない。竹山さんの指摘と同じ発想ですね。

◆としとーくを聞いて◆

業界ごとに関わり方は違えど、共通する志向もあり、実社会での都市に関わる仕事の動向を知ることができ、大変勉強になりました。（M1 田中）

1 月を走り抜ける研究室

This is the Urban Design Lab.

text_TANAKA&MATSUDA/M1

現役の研究室メンバーにとって、学期末・年度末に向かう 1 月は、忙しくも充実した時期であり、研究生活の集大成のための努力の時期でもあります。修士論文、卒業研究、PJ、コンペ、試験勉強と、今の都市デザイン研究室の「ありのまま」を、沢山のスナップとともにお伝えします。

修論 卒研 コンペ その他

01.12—としとーく

設計コンペへの挑戦

永野助教の下、M1/B4 が飯田橋が対象のコンペに挑むことに。
計 1 カ月、そして提出直前 1 週間、熱く戦いました。

コンペ、修士論文ともに山場となる一週間が始まった。英気を養いつつ、静かに黙々と作業するなか、OB、OG も訪れた。

職員の方と学生の昼食

コンペ戦士①

本日を提出予定日にしたコンペチームは正に佳境。黙々と図面を描き上げる。一方、M2 は修論会議。M1,M2 が多数集結した 9 階研究室は大変にぎやかに。

M1 も M2 も一緒に夜を徹

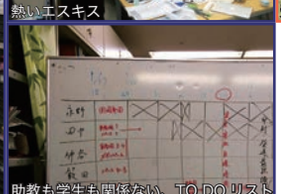
コンペ戦士②

神田 PJ、祭り道具を試作中

神田 PJ の祭り道具を手に入れた。

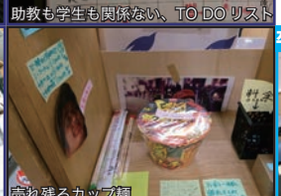
熱いエスキス

安田講堂前でお昼寝

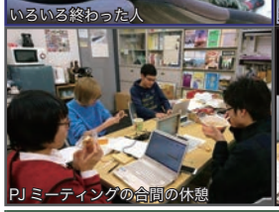

助教も学生も関係ない、TO DO リスト

提出を終えたコンペチームが家路につき、9 階研究室が少し広くなった。5 日後の提出に向け、修論生は追い込みをかける。4 年生はいよいよ山場に突入。

いろいろ終わった人


売れ残るカップ麺

卒研大詰め
プレゼンボード作成中

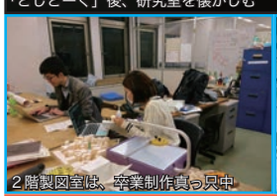

PJ ミーティングの合間の休憩

マガジン紙面制作会議

卒制はまだまだ続く。。。

01.17—修論相談会

「としとーく」後、研究室を懐かしむ


2 階製図室は、卒業制作真っ只中

模型に取り掛かる時期

修論大詰め
先生方による修論の相談会が修論生 1 名ごとに行われる。

01.19—コンペ締め切り

締め切りが迫る 10 階①

締め切りが迫る 10 階②

一方で 9 階

お昼は和やかに

01.24—修士論文提出

提出直後の 9 階の様子。こぼれる笑顔。

01.30-31—修士論文審査

研究室の皆様、撮影にご協力いただき、ありがとうございました！

◆ 1 月を振り返って、一言！◆

B4 福本 遼子	M1 三文字 昌也	M2 砂塚 大河
「敷地に向き合い、自分とも向き合う卒制期間でした。」	「師走以上に走って行った」	「これがあと 11 回繰り返したら 2018 年になってしまうなんて。」

編集後記

田中雄大

タイトルの " 弟走 " には、二つの意味を込めています。一つは、かつて研究室の学生 " 弟 " だった OB・OG の方々が、社会に出た今も最前線で " 走 " り続けているということ。もう一つは、" 師 " がせわしく " 走 " り回る 12 月に対して、我々学生 " 弟 " が一年で最も忙しくなるのは 1 月なのではという思いです。せわしく過ぎる日々ですが、しっかり自分と向き合いながら、遊び心は忘れずに、楽しく過ごしたいなと思います。

information

1 月のウェブ記事

高島平 PJ	高島平 7・8 丁目まちあるき実施！
神田 PJ	佐倉に万灯見学に行ってきました！
その他	Urban Film Night 復活！

ぜひご覧ください！ http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

2 月の予定

2/6-7	ジュリー
2/9	**神田 PJ** 万灯づくりワークショップ
2/13-14	卒業研究発表会